

会長挨拶

日本学生村エンターリング連盟会長 河合 利幸

学連の加盟員数やインカレの参加者数の減少が言われ始めて、早くも4,5年が経過しました。私自身、活動報告書の過去2回の巻頭言でこの話題を取り上げています。しかし不幸なことに、関係各位の様々な試みや努力にも関わらず、この傾向に歯止めはかかっていないようです。もしこのままの減少が続くようだと、各種イベントの開催や組織の維持にも支障が出てきます。さらに悪いことには、幹事長をはじめとする学生役員選びも苦戦し始めているようなのです。

手元にデータがないので正確なことは言えないのですが、振り返ってみると、加盟員数の増減は、日本の景気動向に奇妙に符合しています。バブル景気崩壊頃までは順調に増加、その後停滞、そして減少。単なる偶然かもしれません。ですが、先行きが不透明で「ゆとり」が失われた企業社会で真っ先に切り捨てられるのがお金にならないもの、すなわち文化活動や企業スポーツです。認知度の低いスポーツを支援してくれる企業や自治体は減ってしまいます。さらに、企業の生き残りをかけた熾烈な戦いの中で雇用さえも不安定になっているとあっては、社会人オリエンティアの減少は避けられません。実際、毎年毎年、学生オリエンティアが卒業し社会に巣立っているのに、公認大会参加者数が増加しているようには見えません。子供たちを野山に連れ出せる親や機会が減れば、大学入学時点でのオリエンティングの認知度は下がり、クラブへの勧誘はますます困難になっていきます。

機会や認知度の問題とは別に、オリエンティングに限らず大学クラブ活動一般、特にスポーツ系クラブ活動自体が衰退傾向にあるという問題もあります。むしろ、こちらの問題の方が大きいかもしれません。価値観の違いといってしまうとそれまでなのですが、なぜクラブに入らないのでしょうか。それには様々な要因があるのですが、楽な人間関係、楽な娯楽が氾濫している以上、努力してまで新しい人間関係を築いたり、練習に汗する気にはなれないのかもしれませんが。ということは、現代社会を作り上げてきた私たちの世代にも責任の一端があるということになります。面倒な近所付き合いを避け、休みにはTVゲームといった、個人が孤立したような環境の中で育ってくれば、必然的な結果なのかもしれません。

最近、とある市教委に勤める友人から聞いた話ですが、近年「地域の教育力」が衰えている、それがマナーの低下や犯罪の低年齢化など、様々な問題につながっているのだそうです。「地域の教育力」とは、自分の子供だけを見るのではなく、近隣の子供たちも含めて見守りましょう、少なくとも顔見知りくらいにはなりましょうということだそうです。もちろん、子供たちがいたずらや悪いことをすれば、親でなくても気づいた人が叱ることができればなおよいとのこと。あのおじさんは怖いから、怒られるからと思ってくれるだけでも抑止力になり、自制心の養成につながるのか。この話には大いに反省させられました。ただ、既に手遅れなのか、下手に注意したりすると自分の身が危ないという現実もあります。当たり前のことをすることが難しい世の中になってしまっているようです。

話がずいぶんそれてしまいましたが、私たちの普段の何気ない日常の行動の積み重ねが、まわりまわって次世代の学連、ひょっとしたら日本の命運さえも握っているかもしれないとは、ちょっと怖い話です。逆に個々人それぞれが、日常の中で少しずつでも気をつけていくことができれば、暗雲の中でスタートした21世紀の日本の社会も、少しは第1コントロールの方向に向かって進んでいけるかもしれません。

今回は何やら挨拶文らしくない内容になってしまいました。最後までお読みいただきありがとうございます。また、これまでの学連の活動を内外から援助し支えていただいた関係諸氏すべてに、学連を代表して御礼申し上げます。今後も学連に対する皆様の暖かいお力添えをお願いして筆をおくことにします。